神憑き！

若草赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神憑き！

【Ｎコード】
Ｎ１３１９Ｋ

【作者名】
若草赤

【あらすじ】
神憑家。
神を使役出来る唯一の家系。
そんな家系の末裔の神憑光希。
初の神無し！
代わりに死神が憑きましたとさ。
そんなこんなで大騒動！

神憑家！

深い深い森の中、そこに神憑家本家があった。
広大な東大寺のような家である。
そこの庭に厳粛そうに立っている二人の少年達が居る。
一人は、神々しいショートの金髪で目はシャープ。
一人は、少しボサボサの黒髪で魚が死んだような目。
「神憑（かみつき）　家恒例の神憑を始める！　何で神を憑けれるか分かるか光希？」
少年達の前に立っている老婆が言う。
あ～、若い頃は可愛いかったんだろうな～と思わせる容姿はしているが所詮は老婆である。
「いや、もう聞き飽きたけど」
やる気なさそうに魚の死んだような目をしている少年――神憑光希　（かみつきこうき）　が答える。
光希の横に居る少年がくすりと笑ったが光希は気付かない。
「一応儀礼なので答えてくれませんか？」
すっ、と老婆の後ろから音も無く出てきた青年に光希は少しびっくりする。
青年は短い赤の髪をしており、美しかった。
神だ。
老婆――神憑楓　（かえで）　の憑き神だ。
「あれだろ？　神達が死神共に殺されそうになった所を天界に迷い込んだ神憑斯界（しかい）　が神と協力して死神達を追い返した。で、神は感謝して人間で唯一神を使役出来るようになったと」
死神――人の魂を刈ったり、人を不幸にしたりする神の事である。
死神が神を殺そうとした理由は誰も知らない。
ただ、リーダーであるアルカナの一言で動いたというのは事実らしい。

アルカナは斯界と神々によって封印されて意識が無い状態なので事実は闇の中と言う訳である。
「まあ、八十点じゃな。次、鳶　（とび）」
鳶は答える。
「死神はなんとか追い返せましたが、全員を倒せたり封印出来たりした訳ではないので、神様は死神に対抗出来た唯一の人間である斯界様の子孫に憑いて身の安全を守る事になった」
「合格じゃ。我々の仕事は人間だけでは倒せない魑魅魍魎の類を神と共に昇天させる事じゃ。生き残りの死神などの襲撃もあるからの。それを忘れるなよ」
一旦、一呼吸置き、
感慨深げに言う。
「天界に行って神に選ばれてこい。まあ、鳶なら心配は要らんじゃろうがな。十六才の誕生日おめでとう」
深紅の鳥居を指差してカッカッカと笑う。
要するに俺は心配だってことだな？　と眉を顰めて光希。
神を使役する為、肉体的にも精神的にも十六才というのが適当だったらしい。
まあ、一神でも憑けばいいしな。
三神とか憑かれたら逆に困るしな。
主に、家計が。
神憑光希は一人暮らしだ。
高校生になったと同時に一人暮らしさせられたのだ。
仕送りなんて物はない。
仕送りがないのは魑魅魍魎の類を倒す事を生業としている為だ（無理やりさせられている）。
鳶は鳥居を潜り抜け消えた。
直後、爆撃のような声が東京ドームのように広い庭に響き渡る。
「神憑家の普通の人と変わった所を言ってみろォ！」
東大寺みたいな家の廊下から叫んでいるしかった。

「うっせえんだよ！　糞爺！　鼓膜が破れるかと思っただろうが！」
光希がキレる。
「良いから言ってみろ！」
「あ～もう！　人間の癖に神力が宿っている事！　神を使役出来る事！　妖怪お化けの類が見える事！　死神に物凄い恨まれてる事！
その所為か俺は不幸気味！　あり得ねえだろっつー程、修業修業の日々だった事！」
はあはあ、肩で息をしながら言う。
糞爺を見てみると。
「オイ、マッサージ頼むわ。いや～ホント神って良いねぇ。はっはっは！」
高笑いしながらどう見ても二十代の清楚の女性がニコニコしながら八十代の爺の肩を揉んでいた。
「ちっきしょおお！　無視しやがって糞爺！　俺も使える神を選んでやるぅう！」
やる気に燃える光希を半目で見ながら楓が言う。
「お前達、神様をなんだと思ってるんじゃ？」
「メイドとかそんなん」
と、真顔で光希。
宗教者に聞かれたら撲殺されかねない台詞を吐く光希に呆れかえる楓は溜め息を一つ吐く。
「あ、あと彼女候補？　じいちゃんのイザナミってじいちゃんの事好きみたいだしぃ」
ニヤニヤしながら言う。
肩を揉んでいたイザナミが突如顔を真っ赤にして肩に指をめり込ませた。
ゴキゴキゴキ！　何かの骨が折れる音がした。
「うぎゃあああああ！？」
老人はその力強い手をなんとか離そうと躍起になるが出来る訳がない。

相手は最強と謳われる神なのだから。
「イザナミさ～ん！　マジで止めてりゃあ……！！」
老人はビクンビクン、と痙攣し始める。
「イザナミ！　わしの夫になにをするかぁああ！」
老人とは思えない速度でイザナミのもとへ駆けていく。
「光希様？　流石においたが過ぎますよ？」
「はいはい、分かったよ」
面倒くさそうに光希が言う。
と、
「選定終わりましたぁ！」
憑き神の選定が終わったらしい。
全員が何神くらい憑いたのか見ようと、鳶の方を向き、絶句した。
「人間じゃないわよ。あなたの神力」
「……ホントに凄い」
「格好いい！」
「我の相方にピッタリじゃな」
「帰ったら組手しようぜぇ！」
「掃除とかした方がいいんじゃないでしょうか？」
総勢六人もの神が鳶の周りに浮かんでいたのだ。
女五人、男一人の組み合わせ。
『あり得ねえぇぇぇ！！』
全員の絶叫が完璧にハモった。
多くても三神までの筈なのだ。
ほぼ全ての神を従えた斯界の次に凄いと言っていい。
「ふっ、なら次は俺が行くぜ！」
気を取り直した光希がビシッと革ジャンを整えて深紅の鳥居を潜り抜ける為に歩き出す。
「頑張ってな！　光希」
鳶が言う。
「あったり前だろうが！」

手を振って光希。
別に、鳶みたいにあんなには神は要らない。
家計が苦しいからだ。
ただ、メイドのような神が憑けば良い。
別に男でも構わない。
いや、まあ出来ればそう出来れば可愛くて家事スキルが最強の神様が憑いてくれればなぁ、とは思うが。
鳥居を潜った瞬間。
目の前の光景がブレた。
「おおう！？」
そして、
「ここが……天界ィ？」
鬱蒼とした森である。
確かに絶対に下界にはないであろう樹とかはあるが……。
「神はお前を品定めしているぞ」
どこからか渋い声がした。
「あん？　誰だ？」
キョロキョロと周りを見渡す。
「下下、お前の足下にある石だ」
光希が下を見るとカタカタと揺れ動いた小石が一つ。
「お前、何なんだ？」
小石を拾い上げて尋ねる。
「石だな。又の名を玄武と言う」
玄武岩だけにね。
と光希は思う。
「いや、そういう事を訊きたいんじゃないんだ」
「む？」
玄武岩が小首を傾げた気がした。
「だからさ、何でお前動いてんだよ」
「動いてるものは仕方ないだろう」

「もういいや」
ふぅ、と息を吐く。
こんな世界に生きていく為には細かい事を気にしてられないのだ。
光希は石を置こうとする。
瞬間、
「ちょいちょいちょい！　何を置こうとしている！　我のキャラが気に入らんのか！？　ツンデレキャラか！？　クーデレか！？」
会って数十秒でキャラが崩れ始めた憐れな小石を光希は見る。
つーか何で天界にある小石がそんな事を知っている？
まさか、神憑家の誰かが天界でそんな事を言ったとか？
「もう！　あんたなんかに拾われて欲しくなんてないんだからね！」
可愛らしい声で小石に言われた。
光希はふるふると震え上がり、次の瞬間大木に頭を打ちつけ始めた。
ゴンゴンゴンゴンゴン！
こんな小石　（声がなのだが）　が可愛いとか思った自分が許せなかった光希であった。
だくだく、と額から血を流しながら光希は小石に問う。
「あれか？　玄武は俺に拾われたいと？」
「別に拾われたいとか思ってないんだからね！」
「止めろッ！」
ガン！　小石を殴る。
「おうっおうっ！」
オットセイのような鳴き声と共に血が流れた手をぶんぶん振る。
「あ～大丈夫か？」
ちょっと、小馬鹿にした感じだったのがムカついた。
「何で拾われたいんだよ」
「自分でそんなに動けないからな。もっと別の場所を見てみたいしな」
「ふ～ん。まあ良いか」

天界の物は持って帰るなとか約束事があるらしいけど。
光希はすぅ、と息を吸って大声で、
「お～～～い！　俺に憑きたい神～！　出て来てくれぇぇ！　出来れば、家事スキルが最ッ高の奴！」
出てこない。
……あれ？
そうだ。待遇がいけないのだ。
働かせてばかりは神様も嫌に決まっている。
「金なら出すし、休みだってやるぞォォ！」
出てこない。
「あれ？」
だらだらと嫌な汗が流れる。
まさか……初の神無し！？

神無し！

は、初の神無し……？
「イヤイヤイヤ、まだ分かんねえ！」
ダァァァァッ！　と全力疾走しながら叫ぶ。
「神様ぁぁぁ！　もう家事なんてどうでも良いから出て来ておくれぇぇぇ！」
出てこない。
それでも光希は諦めない。
ここで神を憑けなければ死神に殺されるかもしれないし、確実に神憑家から白い目で見られるからだ。
「いや、そんな事はどうでも良い」
彼は震え上がっていた。
「何かマズい事でもあるのか？」
とポケットに入っている玄武　（小石）　が言う。
「か」
光希は盛大に叫ぶ。
「帰れねえんだよぉぉぉぉ！」
半分涙目である。
「か、帰れない……？」
と、玄武。
「ああ、神を憑けないと天界から帰れないんだ」
神憑の一族は神力を唯一持っている人間なのだが、純粋な神力は持っていない。
というより、純粋な神力を持っている人が居ればその人は人ではなく神として扱われる。
帰る為には神様の純粋な神力が必要なのだ。
……。
「「出て来てくれぇぇぇぇぇ！！」」

涙声で叫ぶ。
出て来ない。
「分かったよ。神様は俺に死ねって言うんだろ？」
悟ったような言い方で肩を竦め、大木の方で三角座りをして、いじけたように指をこね回す。
「いいもん別に……あ～あ。神様は慈悲深いと思ってたのになぁ」
ぶつぶつ言いながら尚もいじける。
「なぁ、玄武。俺が死んだら泣いてくれる？」
「泣くかもしれん」
至極厳禁な声で玄武が言う。
「嬉しい事を言ってくれるなぁ。うふふふふ。でも神様が居ないと帰る事も出来ないんだ。一緒に死のうか？」
遂に心中発言の光希である。
直後。
ズゴオオオン！　爆竹を五十倍したくらいの爆音。
「な、んだ！？」
「死神か！？」
玄武の声が飛ぶ。
「あり得ねえッ！　死神ってアルカナが封印された所為でバラバラになった筈だろ？」
死神のリーダー的存在であるアルカナが封印された為に死神はバラバラに活動するようになった筈なのだが……。
「嫌な時に来ちまったなぁ」
たまに馬鹿が居るという話だったが、こんな派手な暴れ方は初めて見た。
ゴオオオッ！　台風のような風が吹き荒れる音。
次いで爆音。
多分、神はヤられている。
馬鹿デカい神力を感じる。
あれが死神かよ。

「チッ！！」
思わず光希は舌打ちする。
光希の足下から透明な光が溢れ出す。
普通の人には見えない光――神力だ。
「縮地！」
ドン！　足の裏が爆発したような音と共に駆け出す。
ぐんぐん、景色が飛ぶ。
あの馬鹿デカい神力は約十キロ先である。
光希はニヤリと笑って玄武に自慢気に言う。
「神力を媒介無しに操れるのって斯界（しかい）　しか居なかったらしいぜぇ」
「こんなスピードどうやって出してるんだ？」
速度的には、八十キロくらいだろう。
人間には出せない速度である。
「き、聞いてねえのかよ……」
光希は少し肩を落とす。
「神力っつうのは色んな事に使えんだよ。今のは、足の裏に神力を集めて爆発させて加速させてる」
光希にしか使えないので光希しか分からないが、物凄い技術が要る。
爆発で脚が吹き飛ばないように神力で脚をガードしながら爆発させているのだ。
故に、神力の消費が激しい。
「はあ、はぁハア……ゴホァ！」
だからこうなるのは必然な訳だ。
ボタボタと汗が額から流れる。正直数十分の休みが欲しい。
森をようやく抜け出した川のほとりで休憩中である。
脚もパンパンに張ってるし、何より神力を使い過ぎた。
「だらしないのぉ」
と玄武。

「うる、せぇん、だよ、石、ころ、が……」
途切れ途切れに言っている上に凄いしんどそうな為に玄武は悪い事をした気持ちになる。
が、玄武は心機一転したかのように誇らしげに言う。
「我の存在価値が見いだせそうな状況だな」
「存在価値ぃ？」
半目になって光希。
「我は神力で動いていられるのだ。そして、神力を貯めれ、尚且つ神力を上げる事が出来るのだ」
ほう、と光希は魚が死んだような目を一転させて目を輝かせる。
天界の空気には神力が含まれているのだ。
「我が三百年かけて貯めた神力を渡す」
瞬間、神力が元の百パーセントの状態を追い抜いて二百パーセントもの神力が身体に宿る。
（飽和するかも！？）
光希は驚愕を露わにする。
が、それも数十秒の間。
光希は目の前を見据えて言う。
「行くぞ」

神無し！（後書き）

評価感想お願いします。

十神の神が地面に伏せて永眠している。
霧のように霞んでいる青年、イツラコリウキは、十神を殺した死神を殺そうと背後に回る。
死神は、擦り切れた黒いローブを着ており顔は、神の中でもトップクラスの美しさである。
絹のような黒髪が汗の所為で額に張り付いてある。
スタイルも抜群に良い。
まるで、女神のようである。
死神は辺りを見回す。
「居ない？　逃げ出した？」
霧が死神を囲む。
ゆっくりゆっくりと。
「霧？　まさか！？」
死神が理解した時には既に遅い。
パキパキパキパキ、と死神の身体に霜が張る。
霧が霜に変化したのだ。
「か、は……？」
死神は動けない。
「このまま、凍らせて殺す」
霜に変化したイツラコリウキがゾッとするような低い声で言う。
バキン！　霜が氷に変わる直後。
札が死神と氷に変わるイツラコリウキに迫る。
「ルーンよ燃え上がれ！」
ゴアッ！　札が燃える。
オレンジ色の炎が氷に変わる霜を燃え上がらせる。
霜は水滴に変わり、影がニュッと伸びたかのように実体化する。
神――イツラコリウキが実体化した。

普通の青年だ。
しかし、神々しさは隠しきれない。
イツラコリウキは、死神の処刑を邪魔した乱入者を見る。
人間だ。
ピクリと眉が動く。
人間は両手を上げて言う。
「そいつを許してやってくんねえかな？」
死神は驚いたように人間を見る。
ビキリ、とこめかみが嫌な音を立てた。
「死神を許してやってくんねえかなだと？」
その声を聞いただけで死んでしまうような錯覚に陥るくらいの声を人間に向けて発する。
「これだけの神を殺しておいて許せるか！」
激高。
「何言ってんだよ？」
光希はサラリと受け流して言う。
「コイツらしっかり生きてるぜ？」
「な……ッ！？」
イツラコリウキは神力を調べ、惚けたような表情をする。
「随分怒ってたみたいだな。つー事で死神は許してやってくんねえかな？」
「駄目だ」
しかし、イツラコリウキは一言で断ずる。
「だよなぁ。でもさ、神を殺してないって事は神を敵に回す気はないんじゃねえの？」
は？　イツラコリウキは毒気を抜かれたような声を出す。
死神は、小さく笑ってから、
「ふふ、初めまして。光希君？」
「ああ、初めまして。死神？」
俺、光希なんて名乗ったっけ？

そんな疑問が湧いたが今はそんな事を気にしている余裕などない。
光希は死神の方を見て、
「あ～、何でこんな所来たんだよ」
すると、死神はサラリと、
「光希の憑き神になる為に来たのよ」
とんでもない爆弾発言をしやがった。
一人と一神と一つが数秒間の間、その台詞の意味を吟味してから、
「はあああああいいいい！？」
「死神がぁぁぁぁぁぁ！？」
「あり得る筈がああああああ！！」
絶叫。

ボーイミーツデスゴッド

評価感想お願いします！

男の子は死神に会い

光希は祠陽に出会った

「俺の憑き神に？」
何かを言おうとしてはぱくぱくと口を閉じたり開いたりしていたイツラコリウキを横目で見ながら問う。
「うん」
「ふざけるなぁッ！！」
イツラコリウキが怒鳴る。
「何がよ？」
キリリと目尻を吊り上げて問う。
漆黒の大きな瞳である。
どこからどう見ても美少女だ。
（マジ？　マジにこんな、こんな子が俺の憑き神に？　ふ、ふはふはははははは！！　いやでも待て！　相手は死神！　いやでも……くぅううう……ぅう……）
身を捩らせて苦悩する光希を後目にイツラコリウキが犬歯を剥き出しにして言う。
「死神は我らの敵！　そんな奴が憑き神になれると思うなよ！」
イツラコリウキの台詞にビクッと震えて涙声の小首を傾げ、更に瞳をうるうるさせるという反則技を持ってして言う。
「ホント？」
ゲフアッ！？
光希撃沈。
「いや、あの～、まあ、何だ。良いんじゃないのかな？　俺神憑いてないし。それに、そろそろ仲良くしても良いんじゃねえの？」
死神と神が仲良くしても良いんじゃねえの？　と言うのは本音だ。
この死神が橋渡しとして機能してくれれば……。
そんな立派な考えを一応持っているのだが……。
（あんな可愛い子が俺の思い通りに？　俺一人暮らしですよ？

間違いが起きるかもよ？　めくるめくじゅうはちきんわーるどになるかもしれないよ？）
相当頭が湧いているようである。
「あなたまでそんな事を言う訳ですか。神憑家！」
ゴッ！　青白い神力が身体から溢れ出る。
「やばっ！　相当怒ってるかも！？」
死神が言う。
「神憑家の末裔。私が目を醒まさして上げます」
ドン！　地面を蹴り飛ばし、光希の下へ走る
縮地より速い。
「おああぁッ！」
光希はポケットからルーン文字が刻まれた黒曜石を取り出す。
ルーン文字――魔力や霊力や神力で力を発揮する文字の事である。
神力を込め黒曜石の先から透明な刃が出現させる。
「そんな物で私は倒せない！」
黒曜石の刀をイツラコリウキに向けて縦に斬る。
が、
イツラコリウキは刃を手で握りると刃を潰す。
透明な刃は空気中に霧散していく。
「死神ィ！」
そのタイムラグのお陰で死神が到着する。
死神は正しく死神の如く薄気味悪く笑って、
「闇鎌　（ダークサイス）　！」
腕を振るうと、手にニメートルくらいの死神の鎌が現れる。
峰の方で袈裟切り。
イツラコリウキは後ろを振り返るが遅い。
霧に変わる暇も無かったみたいで肩に鎌がめり込み、崩れ落ちる。
「マジでごめんッ！」
済まなそうに崩れ落ちるイツラコリウキに謝る。
「&」

死神の手から深淵の如く黒い――『闇』と言った方がピッタリくる程の黒い炎が出ている。
へ？　光希はちょっと馬鹿みたいに声を出してから、
「ばッか野郎ッ！」
イツラコリウキの肩を引っ張り、光希は一歩前に出る。
「闇火！」
黒い炎が光希に向かって発射される。
瞬間。
光希は真っ黒焦げになった。
2
「うぅう……テメェ！　何危なっかしい物ぶっ放すんだよ！」
元気に復活した光希が怒鳴る。
「頑丈なんだねぇ～」
感心したように死神。
「テメェの所為で……神は一神たりとも憑いてくれねぇしょぉ！」
「それが死神を憑き神として憑かせる為の条件だ」
イツラコリウキが言う。
あの最後助けたのが効いたのだろう。
仕方がないから良いけれど……私達神は憑かないと思え！　と言う譲歩で光希と死神は一緒になったのである。
「名前は何て言うんだ？」
そう聞いた瞬間死神は一瞬だけ悲しそうな顔をして言う。
「祠陽　（しよう）」
3
「それじゃあ、帰るか」
「うんっ！」
やたら元気な祠陽がスキップし始める。
そして、鳥居を潜り抜け、
「へぇ、ここが神憑家かぁ」
物珍しそうにキョロキョロしながら言う。

楓に鎌の憑き神ライヴ、それに鳶に鳶の憑き神達。
更に光希と鳶の祖父とイザナミが光希と死神を黙って凝視する。
祠陽は「？」と何も分かってないのか、井戸を興味深そうに見る。
光希は光希で、
（やっべぇ、可愛い死神　（家事も出来るらしい）　を貰える事が決まって舞い上がってたけど……神じゃなくて死神だもんなぁ）
元々、家系の伝統とか歴史どうでも良いよ、と言った性格だったので忘れていた。
取り敢えず笑っとけと、あはあはあはと笑いながら軽く早口で言う。
「し、死神憑いちゃった♪」

憑き死神

「何だとォォォ！？」
と、祖父。
「何じゃと？」
聞き間違いであって欲しいと願いながら楓。
「ぶっ、はははははは！」
と、腹を抱えて鳶。
「死神ッ！？」
と、神達。
「あっ！　祠陽さん！」
と、鳶の神が言う。
「あれ？　ジェフティ？」
きょとんと祠陽。
「ジェフティと友達だったのかァ！？」
この雰囲気を打開しようと祠陽とジェフティとの関係に大袈裟に驚く光希はジェフティと言う女性を見た。
丸い身体のライン。
ふくよかなバスト。
髪は桃色で、顔は可愛いの一言に尽きる。
目は大きくパッチリとしており、丸い感じがする。
身長は、光希より五センチくらい低いだろう。
全体的に優しい感じのする女性だ。
「おおう……」
宇宙の神秘を見た人のようになんとも言えない感動を三文字で現した光希を祠陽は睨みつける。
「うわぁ……俺もこんな憑き神が欲しかったなぁ」
思わずポツリと零した台詞は祠陽しか聞き取れない程の小声だった。

意識して出した台詞ではない分質が悪かった。
本音だという事が分かった。
祠陽はその一言にキレた。
漆黒の瞳を冷ややかに吊り上げ細め、光希を睨む。
それだけで人を殺せそうな瞳だった。
「へ？」
殺気を感じた光希は祠陽の方を向き、
「闇炎ッ！」
ゴッ！　闇火の強化版なのだろう、やたら熱い闇の炎が光希に放たれた。
2
二十畳はあるだろう居間の卓袱台で楓と光希の二人は居た。
「何だよ、アイツ……」
シクシクと泣きながら言う光希は酷く情けなかった。
「何だよはこっちの台詞じゃ！」
楓が怒鳴る。
「死神を憑けて帰って来た理由は何じゃ？　というか死神が人間を好きになるっていうのはどういう事じゃあ！？」
死神――人の魂を刈ったり、人を不幸にしたりする神の事である――は、普通人を好きになったりする事はない。
「んな事言われてもなぁ……」
とつまらなさそうに光希が言う。
「もう良いわい。だが、除名処分になるかもしれんぞ」
除名処分――余りにも力が無かったり神を憑けられ無かったりすると下る処分である。
「なんでよ？」
楓はちょっと呆れた表情をして言う。
「憑き神目録って言うのを知らんのか？」
「あん？」
初耳である。

「要するに、誰にどんな神が憑いたかを記しておく書物の事じゃ」
……うわぁ……。
光希の顔が「あちゃー」としか表現しようのない顔になった。
「更に、次の月に家族会議があるからのぉ」
……あ～あ……。
激しく鬱。
除名処分を受けてしまうと仕事が回って来ない。
自分で仕事を見つけて自分で解決しやがれ！　という感じになるのである。
楓は、ふと。
「あの死神の神力は一体どうなっておるんじゃ？」
ゴアアアン！
「あれはエグいよな。あれだろ？　エグ過ぎて神力を抑えるペンダント付けないといけないんだろ？」
ドゴオンッ！
「そうじゃな……神力吸収ペンダントを付けていても神クラスの神力を持っているなど尋常ではないな」
遂に光希はキレる。
「つーか、さっきからうるせぇんだよぉ！」
ゴアアアア！　ドゴオン！　ビッビッビビ！　キュイイイン！
激しい音がする。
「つーか何やってんだよアイツら」
ずずっ、と気を落ち着ける為にお茶を啜る。
「私は死神だから、暴れたいのよ。とか言って柊　（ひいらぎ）と一緒に妖怪を刈りに行ってるぞ」
柊は鳶の神である。
ゴッ！　バアアアアンッ！
光希はおもむろに立ち上がり、
「じゃあ、俺帰るわ。この音にはもう耐えれねー」
あ、コレ都会土産。と入れっぱなしのままだった大作ＲＰＧのゲ

ームを渡す。
「おおう……これはｓｈａｄｏｗの最新ゲームでは無いか！」
余りの食いつきに少し光希は苦笑いする。
趣味がプラモデルとゲームに純文学　（偶にライトノベル）　という老婆も珍しいと思う。
「おーい、祠陽帰るぞ！」
襖を荒々しく開け放って言う。
瞬間。
ニメートルはある死神の鎌が闇の火を纏って飛んで来た。
「ぐぼらぁ！？」
内ポケットに入ってあった玄武のお陰で斬られて死ぬという最悪の結果は免れた光希だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1319k/

神憑き！

2010年10月10日22時25分発行